

10月の住職のひとこと



おえしき 御会式 日蓮大聖人御命日の報恩法要

努力というのは、多かれ少なかれ誰でもしますが、しかし、努力が、**執念**（深く思い、決して諦めたり、忘れたりしない。）と呼べるものにまで高める・・・ということは、至難の業。^{わざ}《我れ日本の柱とならむ、我れ日本の眼目とならむ、我れ日本の大船とならむ、等とちかいし願、^{がん}やぶるべからずー開目鈔ー》宗祖日蓮大聖人の執念ともよべる誓願である。

1人の人間として、大聖人を想う時、「人生を拓く・道を拓く」・・・典型的人物像が、そこからは浮かび上がってくる。

現代に、こうゆう逸話が残っている・・・その青年は、地方の大学を卒業し京都のある会社に就職した。就職難の時代・・・その青年の喜びは、実に大きかった。・・・しかし、その喜びが色あせるのに、さして時間はかからなかった。何故ならば、その会社は赤字続き、給料が遅配されることも度々。^{たびたび}・・・これに対して労働組合は頻繁にストを繰り返す。その青年は、会社にウンザリ、同期の友人と相談し、自衛隊に入ることと決定し、実家の長兄へ戸籍抄本を送ってくれるように頼む。・・・すると、長兄よりの手紙「働くところもなく、おまえを雇ってくれた会社に何の恩返しもせずに辞めるとは何事か！・・・」長兄の叱責がこたえた彼は、生活も考え方も一変させる。「よし！この会社という場こそ最高の場所と思おう。」・・・彼は、その会社に布団から炊事道具まで持ち込み、寝る間も惜しんで、仕事に没頭・努力をした、それこそ**努力から執念と呼べるものに変える**んです。・・・こうして開発された製品に、ある大手メーカー

が着目、大量の注問が舞い込む様になる。しかし、そんな時期、労働組合は、賃上げを要求して全面ストに突入。その青年の行為は、全組合員から非難・罵倒の連続・・・しかし、その青年は彼らに一步も譲らない「私は会社の回し者でもなければ、みなさんも敵でもない！よく考えてみて下さいヨ・・・会社で唯一黒字を出しているのは、私の**執念**で作りに上げた製品だけじゃないですか・・・この生産をやめたら、それこそ、みなさんの給料も払えなくなるんじゃないですか？」その青年の態度に組合幹部は、心を動かして、スト中も仕事の続行を黙認。・・・本年8月30日、他界された京セラ創業者〈平成の経営の神様〉稲盛和夫氏、25歳の頃の話である。

努力が執念に変わった時、事は大成する。・・・私達の法華經受持の姿も是非とも、こうでなければならぬ。稲盛氏言く「成功者と不成功者の差は、紙一重。・・・その紙一重とは何か？・・・不成功者には、**ネバリ**がないんです。」

松下幸之助氏も、こうゆう事を言っている「失敗はありますヨ。でも、成功するまで**続けたら**、失敗はない！・・・成功とは成功するまで、**続けること**です。」・・・

継続は、力である。・・・受持することです。宗祖日蓮大聖人言く「**受けるは易く、持つは難し。さるあいだ成仏は持つにあり**」・・・人生・道を拓く鍵でしょう。・・・本年第741 ^{おんき}遠忌、^{おえしき}御会式には宗祖を偲び、その御姿に学ぶ原動力は、正に《**受持**》に徹する心掛けです。・・・心構えというのは、どんなに磨いても毎日ゼロになる能力である。毎朝、歯を磨くように心構えも、毎朝磨き直さねばならない・・・朝の^{ごんぎょう}勤行の大切さです。稲盛氏日く「**新しき計画の成就是、只 ^{ふくつふとう}不屈不撓の一心にあり。さらば、ひたむきに ^{おも}只想え。気高く、強く、一筋に。**」**巨星墮つる**・・・その悲しみは、ひとしお・・・偉大な**道を拓いた**、その想いに、心耳を澄ませたい。

お互い様に《**発憤力**》こそ、仏道を拓く源であることを肝に銘じたい。